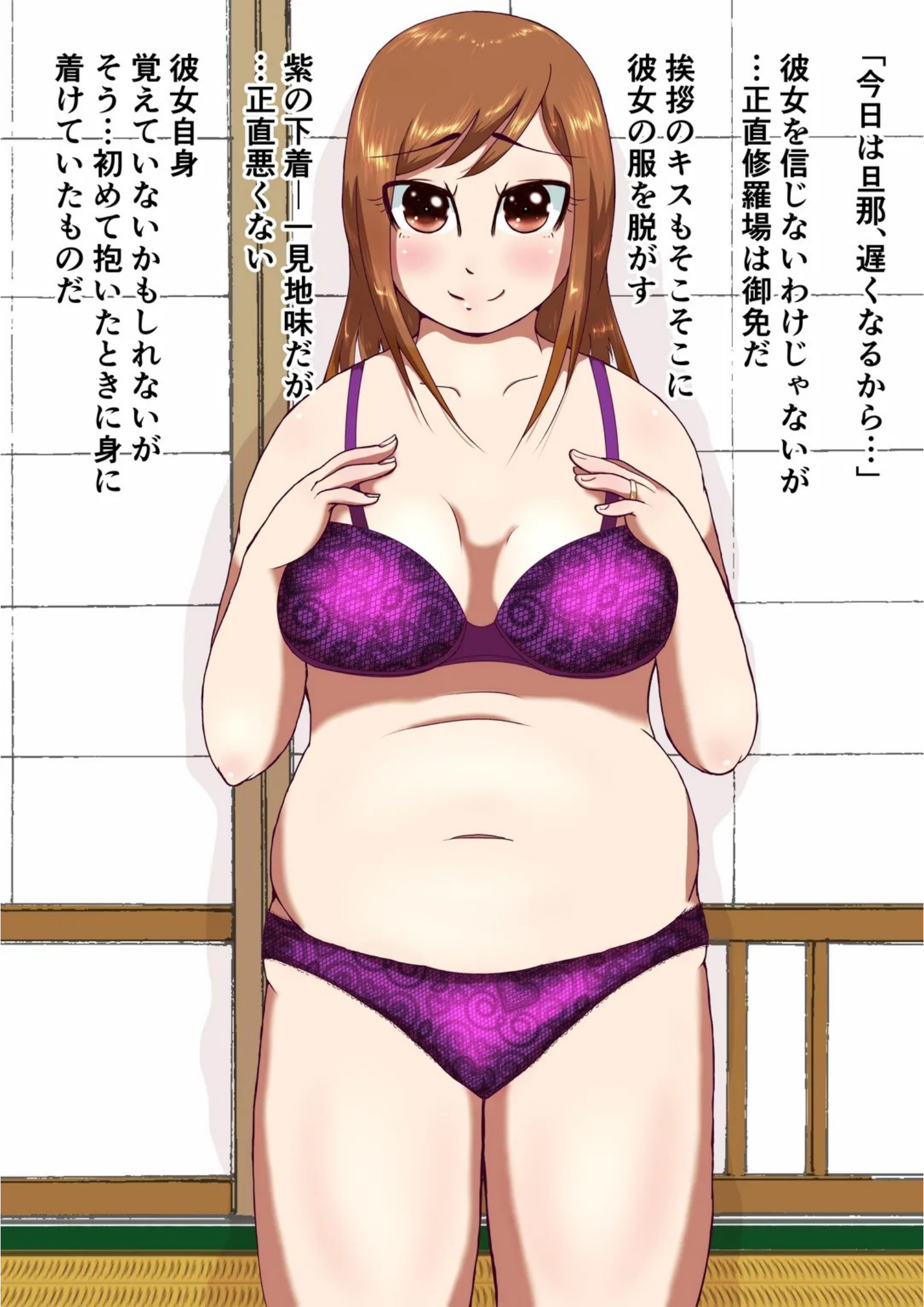
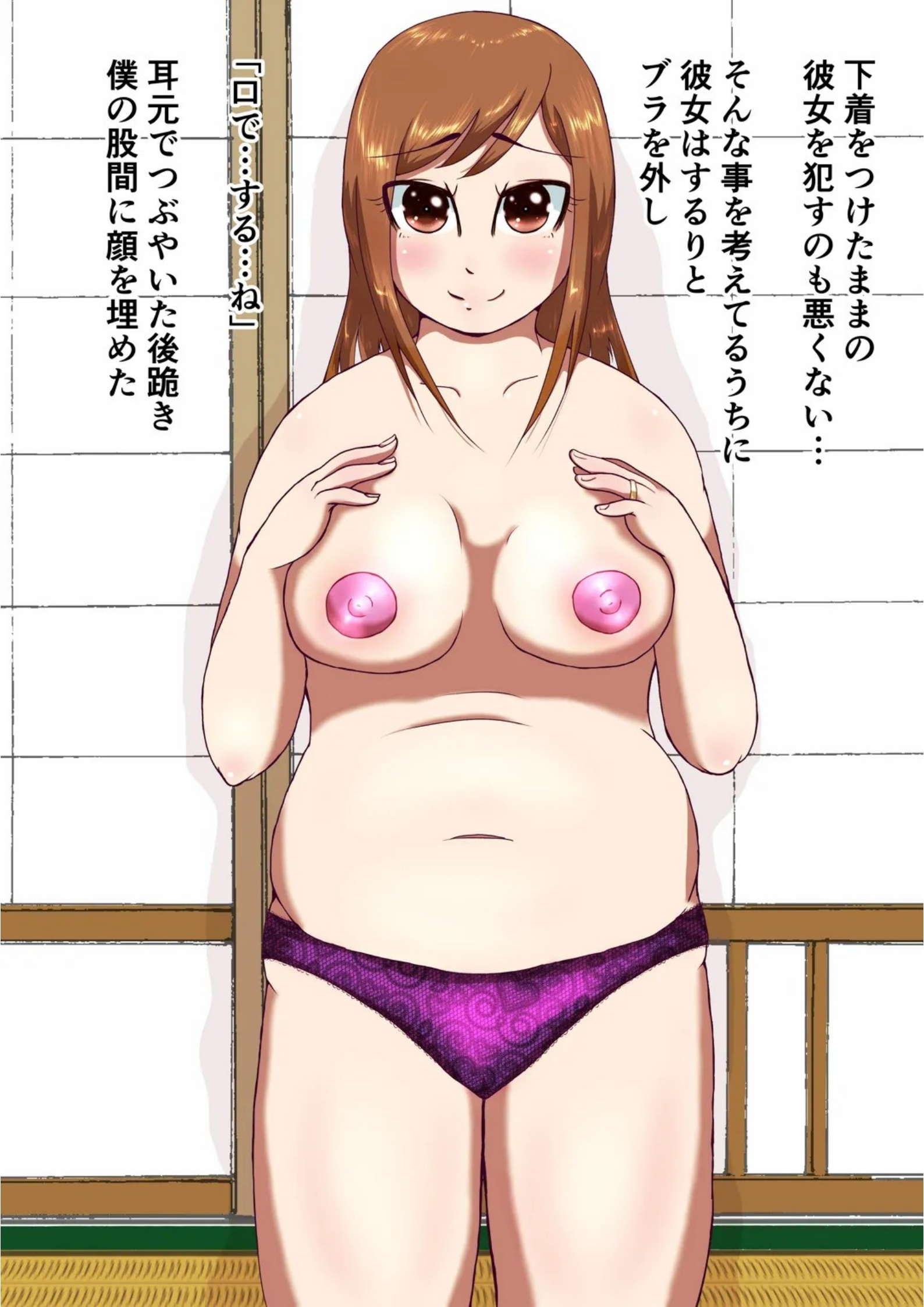
の下着――一見地味だが
正直悪くない
女自身
いとしい人妻

近所の古いアパート―
僕はかつてのバイト先で
同僚だった女性に会うため
ここに通っている
「いらっしゃい」
彼女は今日も潤んだ瞳で
僕をアパートに迎え入れた
「…会いたかった」
同じ気持ちだ…けれど
言葉にはしない
彼女は他人のモノなのだ
…人目を忍んで


「今日は旦那、遅くなるから…」
彼女を信じないわけじゃないが
…正直修羅場は御免だ
挨拶のキスもそこそこに
彼女の服を脱がす
紫の下着――一見地味だが
…正直悪くない
彼女自身
覚えていないかもしれないが
そう…初めて抱いたときに身に
着けていたものだ


下着をつけたままの
彼女を犯すのも悪くない…
そんな事を考えてるうちに
彼女はするりと
ブラを外し
「口で…する…ね」
耳元でつぶやいた後跪き
僕の股間に顔を埋めた

「んっ…ん…あ…んん…」
ピチャピチャといやらしい音を
響かせながら
精一杯の愛撫を続ける彼女
…正直上手くはない
が、嫌いじゃない
一生懸命な彼女の姿が
愛おしく感じられるからだ

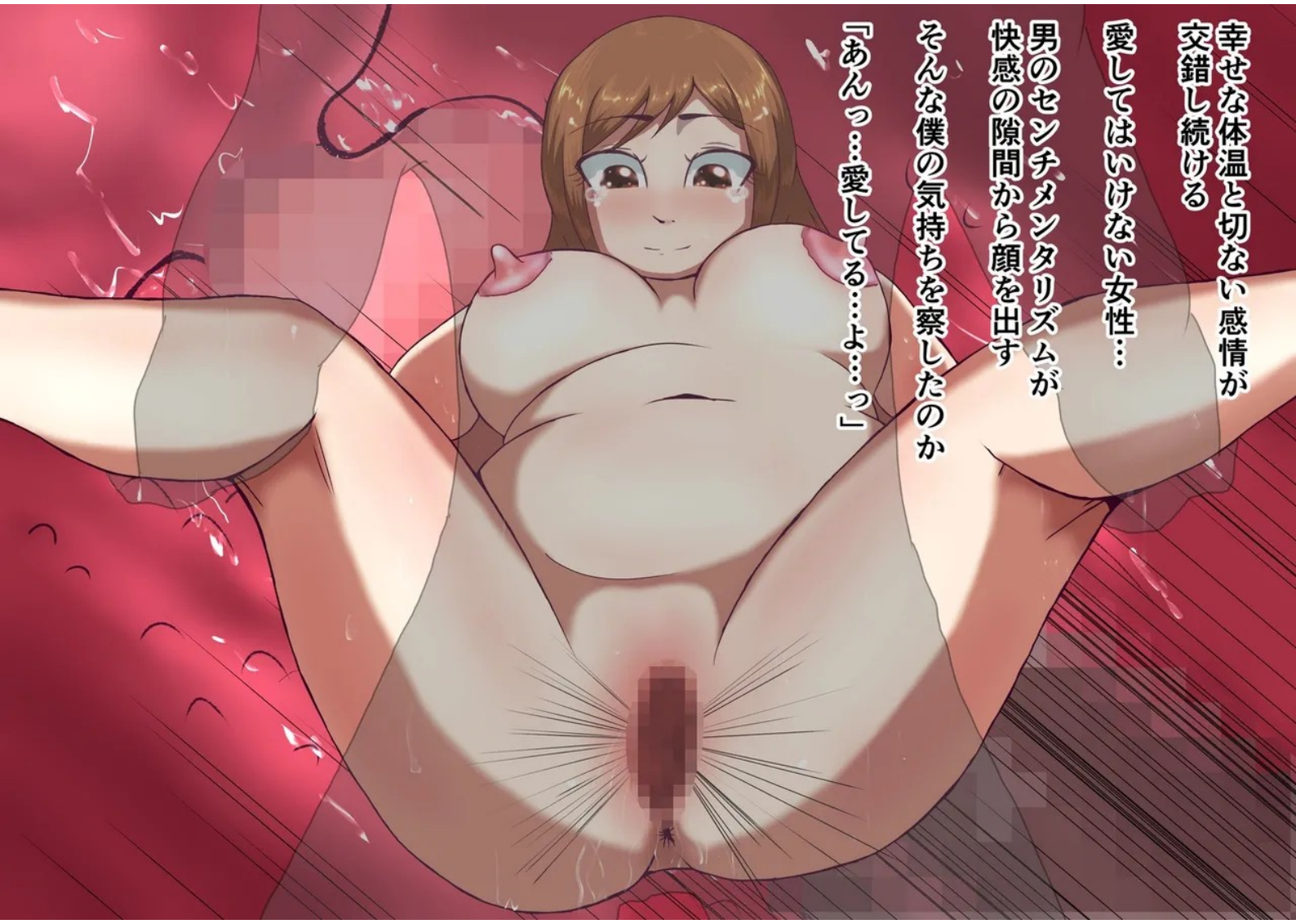
しばらくすると
多少の射精感がこみ上げてきた
「出ひて…くひに…んっ…」
彼女はどういうわけか僕の精液を
飲みたがる…いつも

彼女の頭を掴み少しだけ乱暴に
ピストン運動をする
苦しそうな、でも満たされたような
彼女を見つめながら
一週間溜め込んだものを
躊躇なく吐き出す

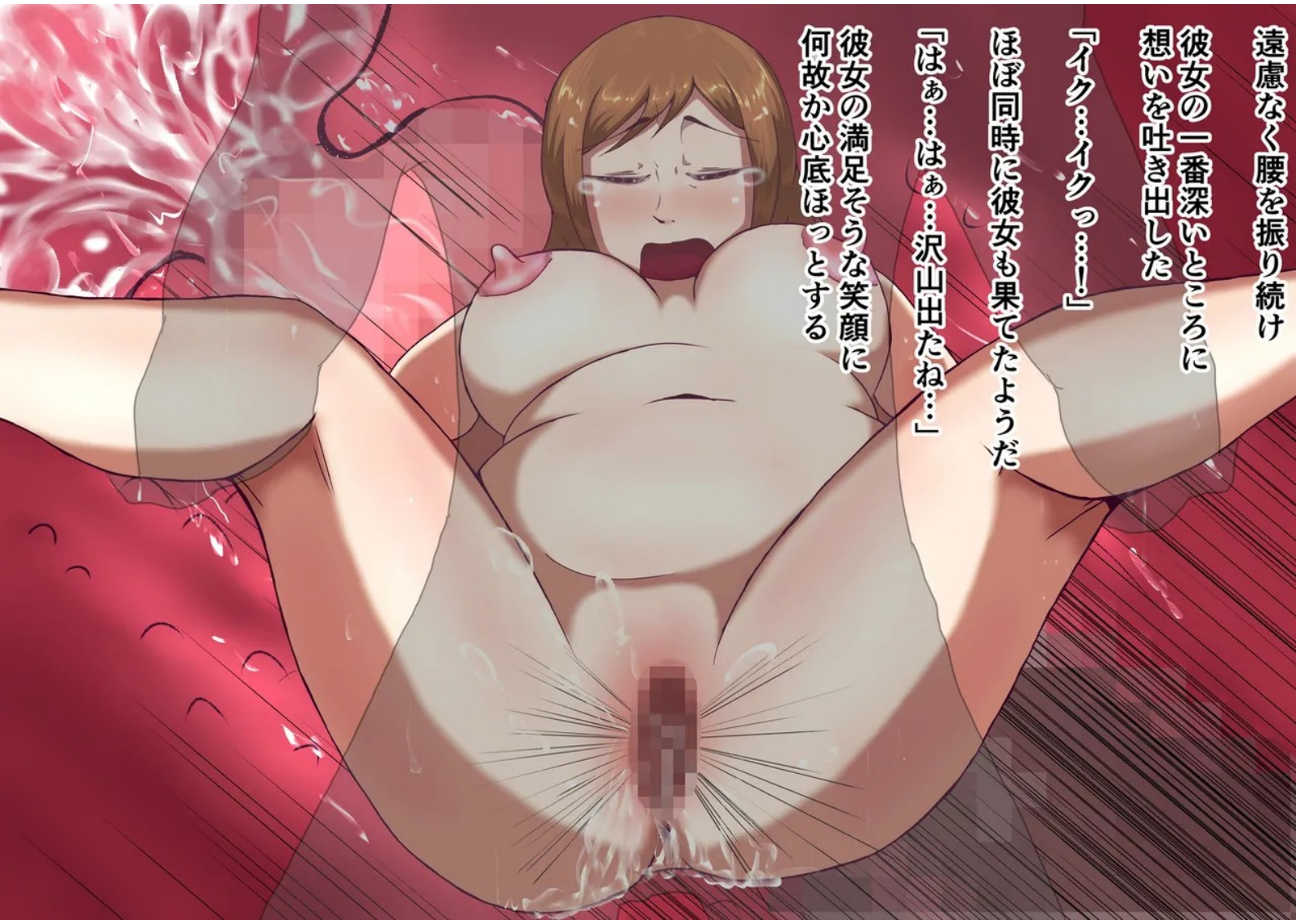
「たくさん…出たね」
満足そうに笑うと再び
僕のペニスを咥えた
欲しい、の合図だ

シーツの上に彼女を押し倒し
パンツを剥ぎ取る
既に大洪水だ
だがあれだけ必死に
フェラしてもらった手前
僕も彼女を愛撫しようとする
…けれど
「すぐに挿れて……欲しいの…」

ゴムをしようとしたが断られた
「今日は生で…お願い…」
誘惑に抗えずゆっくりと挿入する
「んっ…あ…んっ…」
切なげな吐息が漏れる
彼女の生暖かい膣の感触が
…堪らない
熱くヌメる肉壷が
僕のペニスを扱き上げていく
僕も負けずに腰を振り続ける
「あんっ…あっ…んんっ…！」
苦しげな声とは裏腹に
彼女は快感の渦に飲み込まれていく

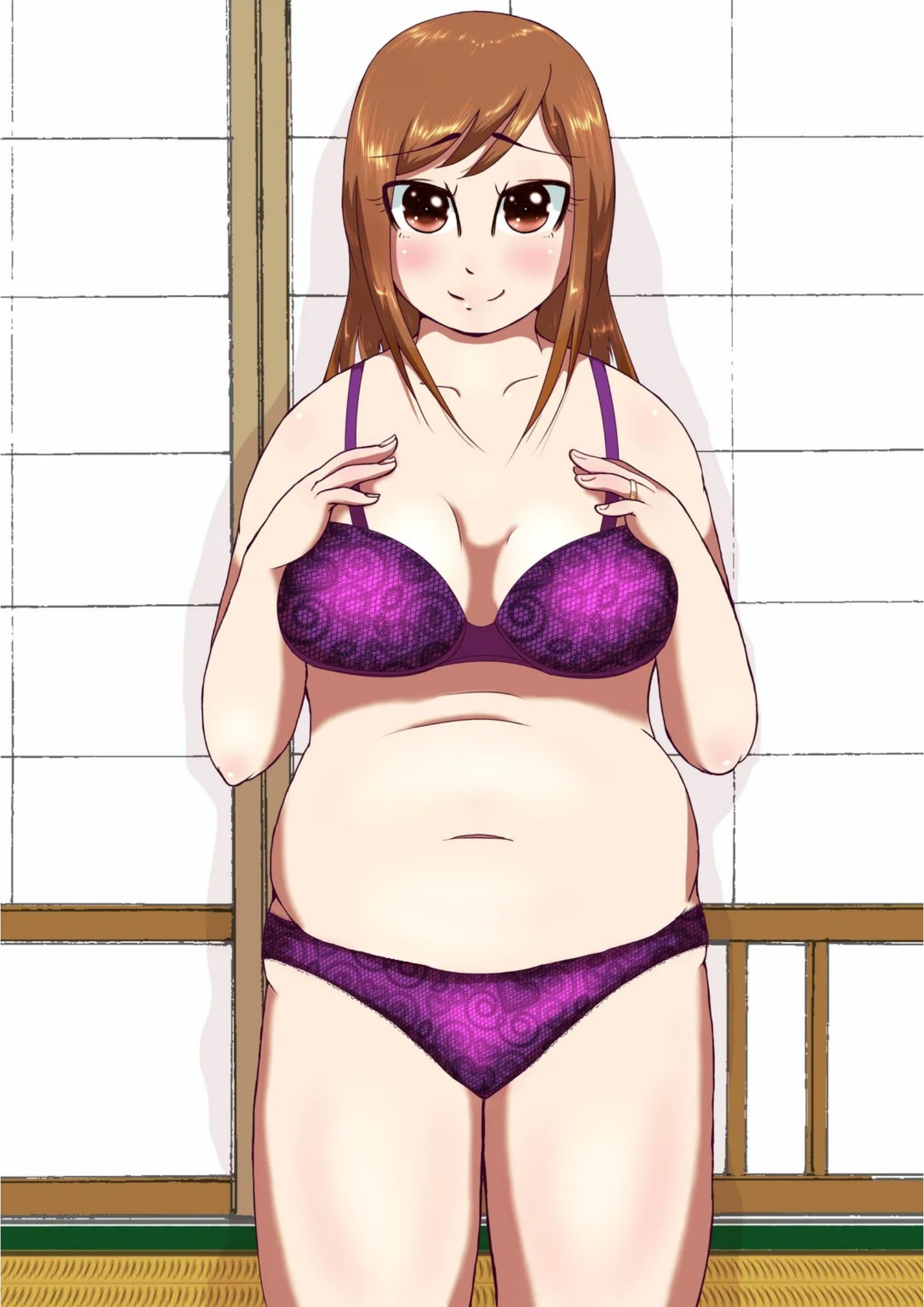

幸せな体温と切ない感情が
交錯し続ける
愛してはいけない女性…
男のセンチメンタリズムが
快感の隙間から顔を出す
そんな僕の気持ちを察したのか
「あんっ…愛してる…よ…っ」

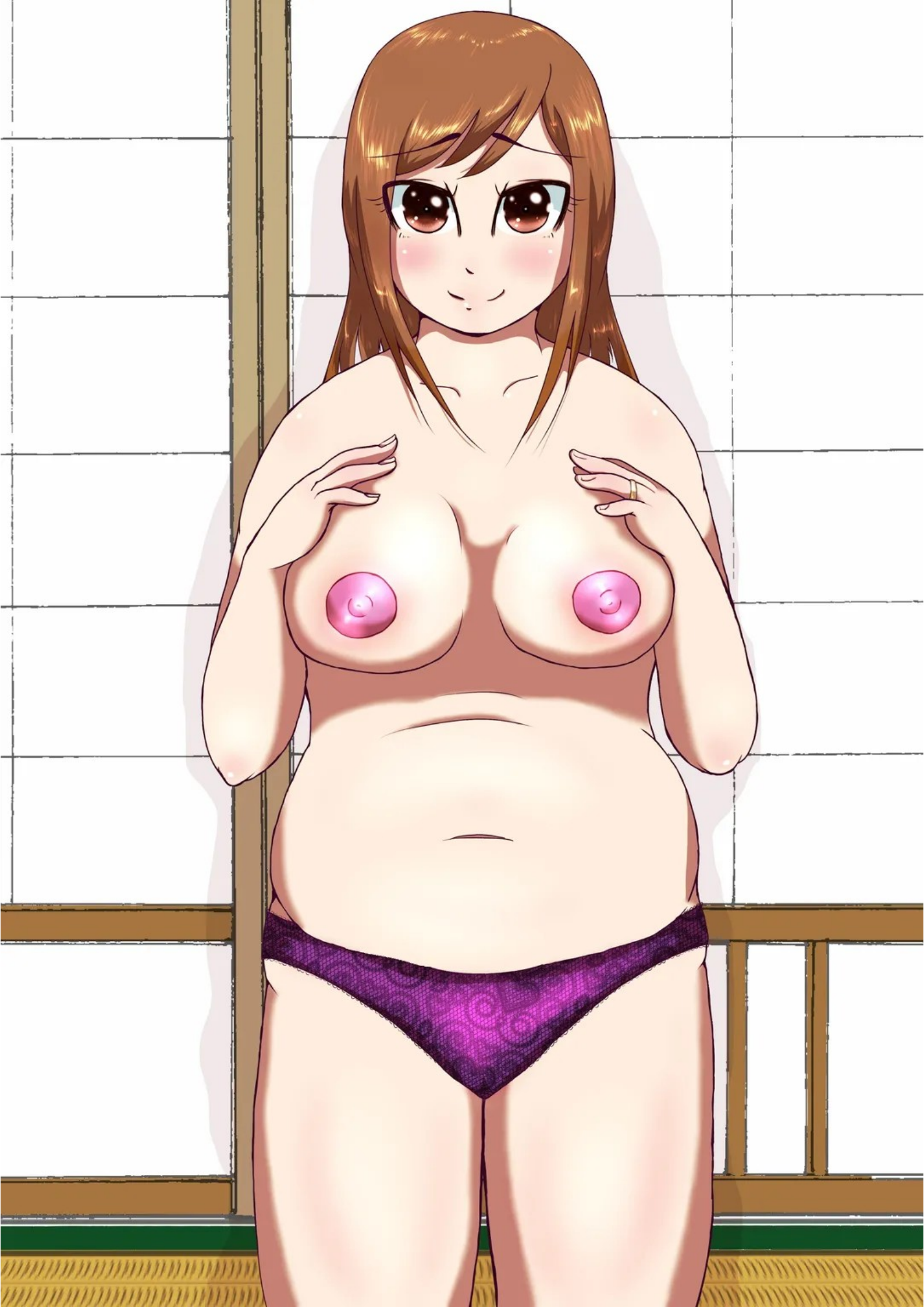
母性だとでも言うのだろうか
彼女を抱いていたつもりが
彼女に抱かれていたことに
気付く
その刹那
強烈な射精感が
湧き上がってきた
「あっ…い…いきそ…イクっ…!」
彼女の限界も迫ってきているようだ

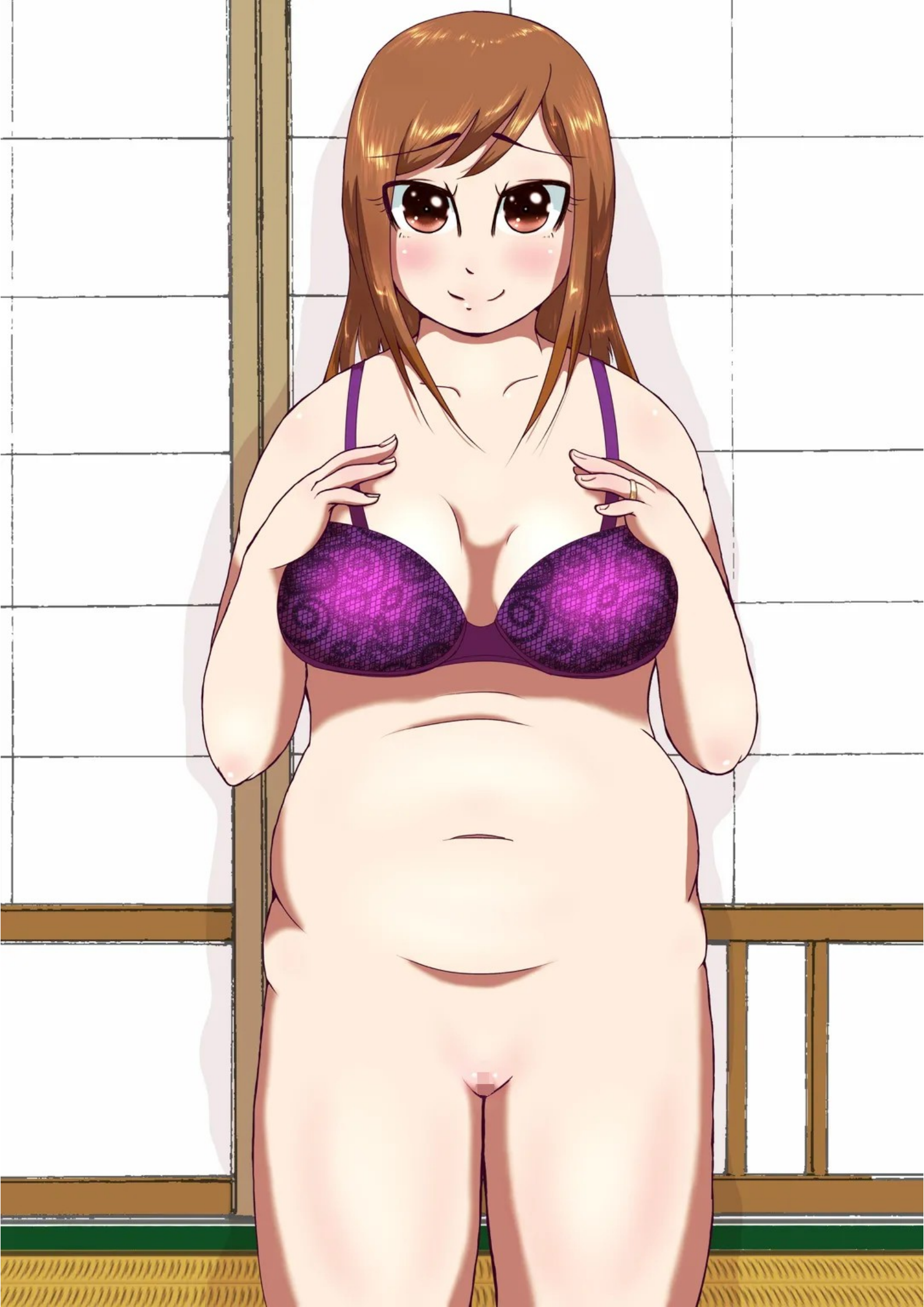

遠慮なく腰を振り続け
彼女の一番深いところに
想いを吐き出した
「イク…イクっ…！」
ほぼ同時に彼女も果てたようだ
「はぁ…はぁ…沢山出たね…」
彼女の満足そうな笑顔に
何故か心底ほっとする

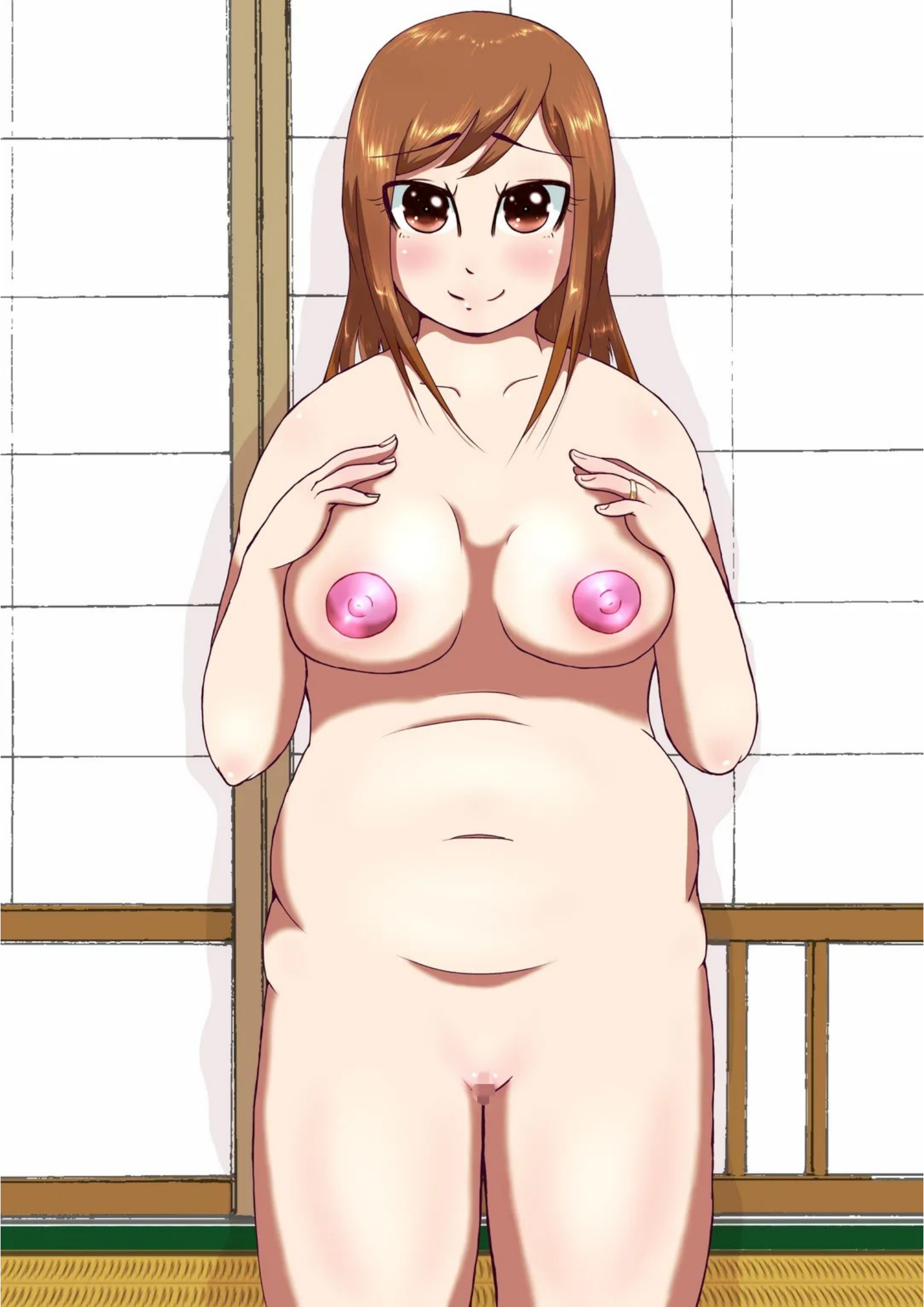
「…ホントは危ない日なの…今日」
申し訳無さそうな彼女
だが…解っていた
彼女をモノのように扱うことで
自分の本心を隠してきたつもりだったが
…彼女の勝ち、だ
未来はわからない…が
僕も素直になってみようと思えた

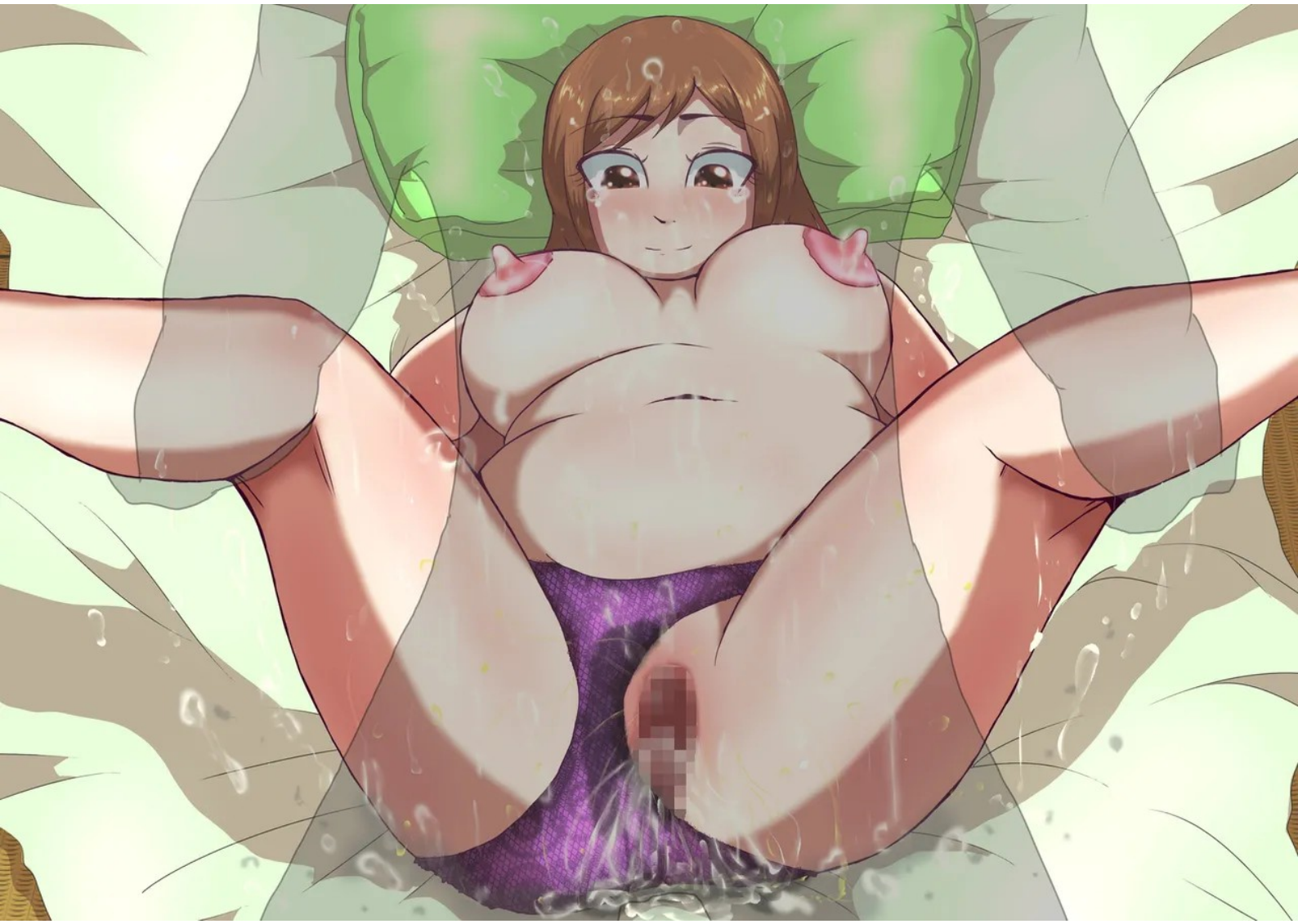
文章なし＆
差分イラスト

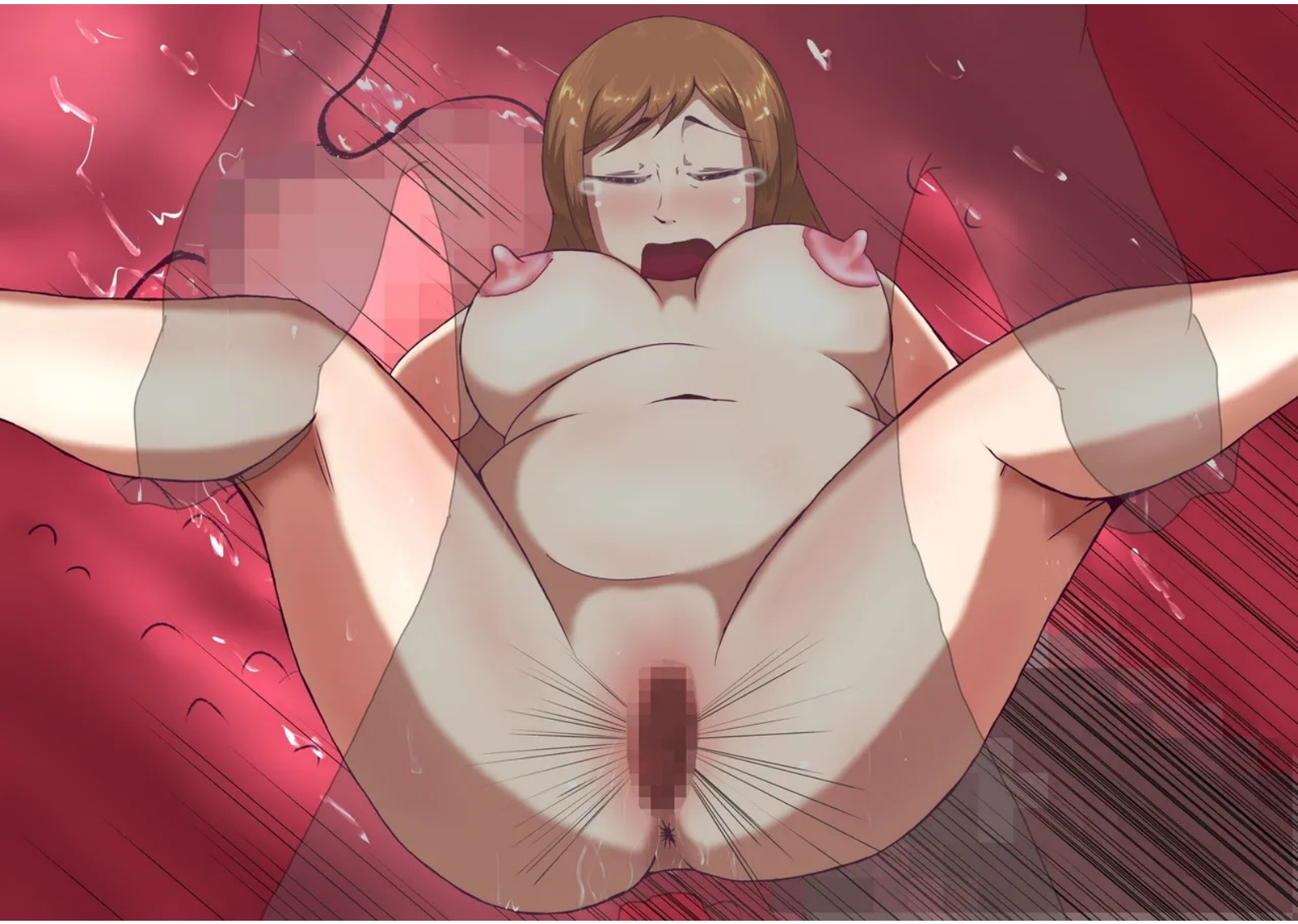


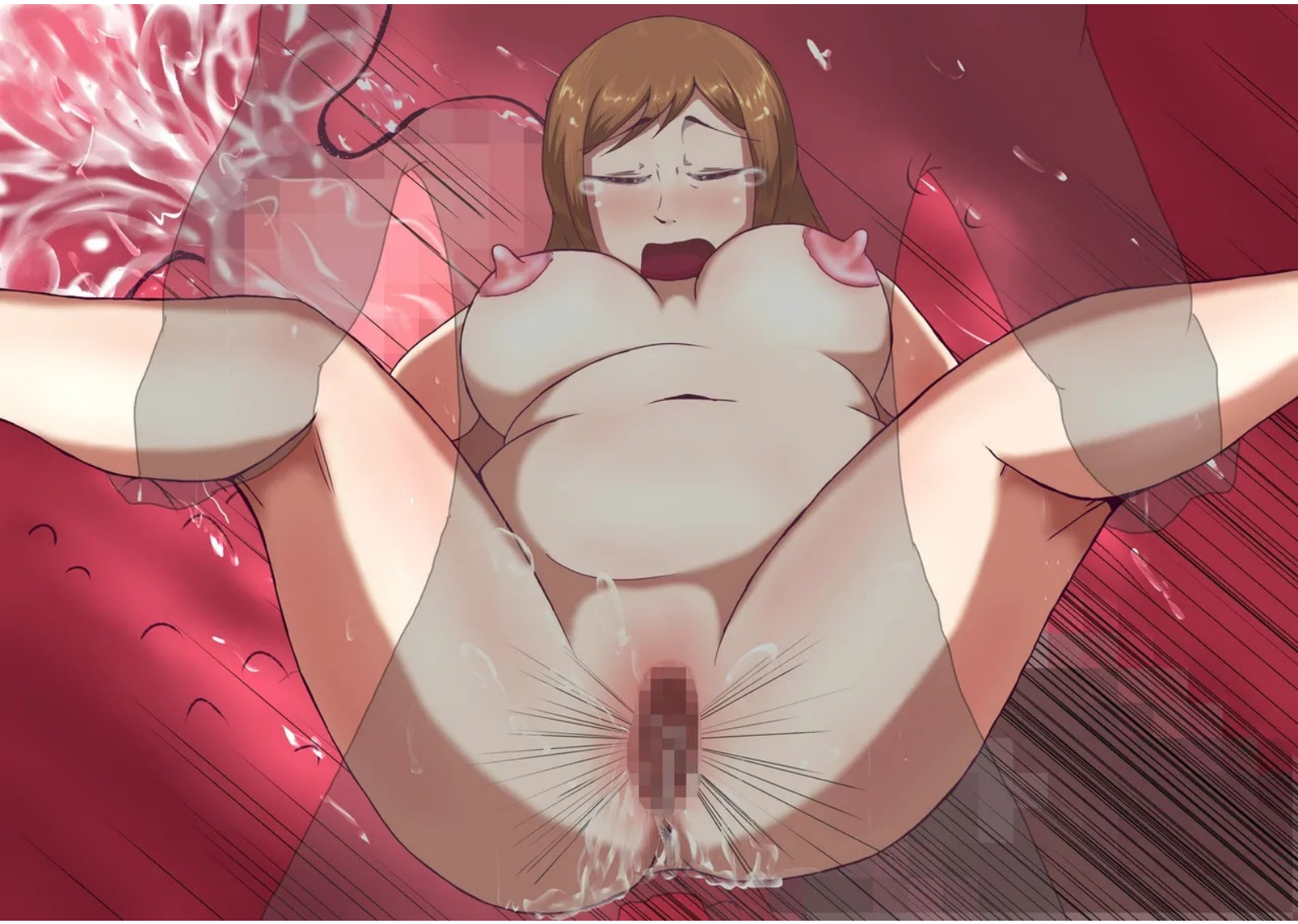




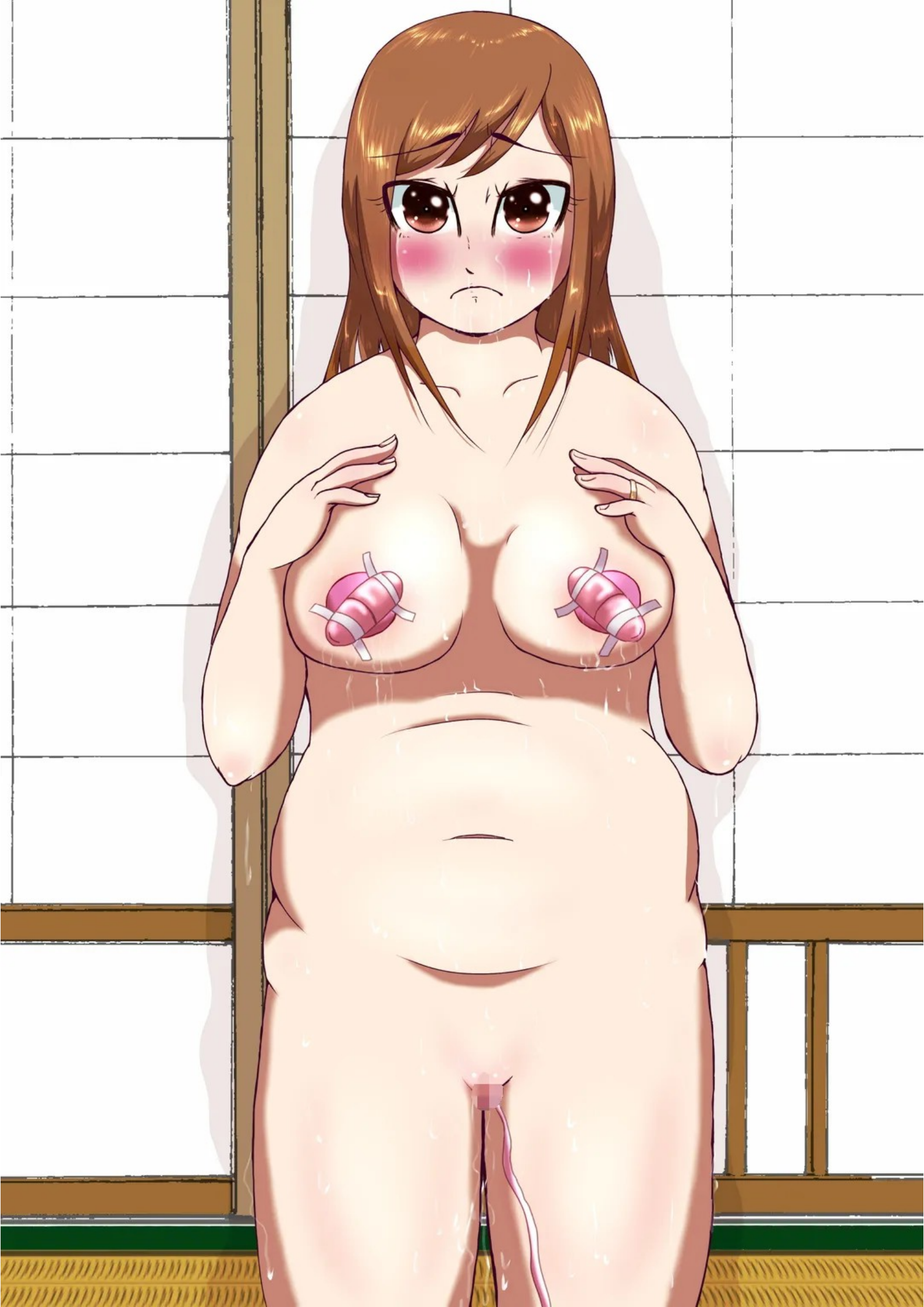








おまけ



プロジェクト エムジェイのブログ
「ProjectMJのたまり場」
http://ayasehateru.hatenablog.com/